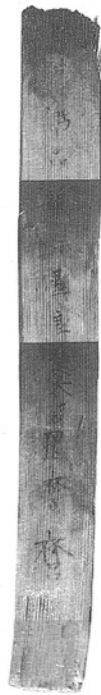


加茂遺跡周辺で「×家郷」と表記される可能性をもつのは加賀郡内の井家郷及び駅家郷であり、どちらであるかは決しがたい。木簡の時期については整理中でもあり不詳だが、平安時代に属するものと推定される。

なお、釈読にあたっては、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

(和田龍介)



石川・加^{かも}茂遺跡 (2)

- 1 所在地 石川県河北郡津幡町字加茂・舟橋
- 2 調査期間 第五次調査 二〇〇五年(平17)六月～九月
- 3 発掘機関 津幡町教育委員会
- 4 調査担当者 中嶋徹郎・戸谷邦隆
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 平安時代前期(主に九世紀)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



加茂遺跡は、河北潟東岸の丘陵裾部に位置する縄文時代後期から古代にかけての複合遺跡である。主体は平安時代前期で、『和名抄』に見える「英多郷」に含まれる地域と考えられる。

(財)石川県埋蔵文化財センターの調査により、一九九四年には古代北陸道とみられる道路遺構が、また二〇〇〇年にはいわゆる「加賀郡勝示札」が出土したのを受け、津幡町教育委員会が

遺跡の性格把握のための詳細分布調査を二〇〇一年より行なっている。二〇〇三年には、鬼瓦を含む瓦類を伴う礎石建物を検出し、近くの溝からは施設名を表すと思われる「鴨寺」の墨書土器が数点見つかった。今回の調査区は勝示札出土地点から北西へ約三〇〇m、礎石建物より西へ約一〇〇mの地点にあたる。隣接する地点から直径二五cm程度の柱根列が見つっており、その広がりも期待された。調査面積は約五〇〇㎡である。

調査の結果、柱根列は今回の調査区には広がらないことが明らかになった。また、小規模な掘立柱建物群を検出し、これと柱根列の間に二列の板塀が存在することがわかった。これらの構築物は主軸がほぼ同一方向であり、計画的な土地利用が窺える。後述する出土遺物と建物状況から、何らかの公的施設の可能性が考えられる。

木簡は、建物群の脇を流れる幅約七mの大溝の下層から三点出土した。この溝からは、「曹」「中家」「内」「英太」など、数十点に及ぶ墨書土器も出土した。溝の深さは一番深い箇所で約一・四mを測り、決るように急激に深くなる断面形態をもつ。所々に細い杭が打たれており、何らかの人為的な改変が行なわれている可能性が高い。木簡の年代は、共伴遺物からみて九世紀後半と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 英太卅

(157)×23×7 081

(2) 閏十月使便県

(264)×17×6 081

(3) 道

(43)×20×2 065

(1)は上下両端とも欠損している。表面は滑らかに調整されているが、墨痕はやや不明瞭である。地名と思われる「英太」と数量を表す「卅」の上の欠損部には、品名が記されていた可能性が高い。

(2)も上下両端とも欠損しているが、表記は完結している。墨痕は比較的明瞭である。「県」を閏十月に遣わしたという内容で、人名「県」も地名「英太」も同じアガタであるところが興味深い。

(3)は、ごく薄い板に記された習書木簡である。板には孔が穿たれそこに桜の皮が通され裏面で結ばれている。曲物の破片に習書した可能性はあるが、文字と孔との先後関係は判別しがたい。

なお、木簡の釈読にあたっては、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

(戸谷邦隆)

